嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第25号／１９９３年（平成５年）６月発行（年３回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1－30－9（〒156）
TEL 03－3426－2323
・発行人＝石井哲夫　・編集人＝友田篤

障害児臨床家の育ったみちのり

宇佐川　浩

はやいもので、淑徳大の研究施設で障害幼児の臨床に携わるようになって二十一年たった。現象学的精神病理学というオリエンテーションをもつ心理臨床家としてスタートした筆者にとっては、当初障害児とおもうようにはかかわれない自分に、もどかしさを感じることも少なくなかった。その頃は当然、遊戯療法を武器としてアプローチを試みていたのだが、『あそべる』ことを前提にした遊戯療法が、フラフラしていたり、常同行動の多い、障害の重い『あそべない』子どもに、かかわりあうことは難しかった。もちろん、彼らが示してくれる常同行動やパニック、口への固着、もの投げなどの、臨床的発達的意味づけなど、わかるはずもなかった。

ところが、興味深いことに、自由あそびの場面よりも、やや構造がある音楽療法場面や、教具を用いたモンテッソーリ法の場面の方が、関係がはるかにとりやすく、常同行動をはじめ問題行動の出現も少ない子どもがいることに気づいた。自由あそびが最も子どもとかかわりやすいと信じきっていた筆者にとっては、いささかショッキングなことであった。

以来十年以上ひたすら、千点を越す教具・遊具づくりとその発達的な検討に励んだのだが、障害の重い子どもとも、かなり係わりがとりやすくなったことは事実である。同時に、教具開発が、障害児の対人・対物関係の初期発達を押さえるのに大変貢献した。

教具や場面構成という物的環境が発達的に整備されるにつれて、セラピストがいかにかかわるかという、臨床家としての資質が気になりだした。そこで学生セラピストの臨床訓練に関する研究を六年ほど精力的に行った。心理臨床は伝統的にセラピストの係わり方を中心に検討をすすめるのだが、障害児臨床では、子どもの物的環境の発達的検討抜きに、セラピストの係わりが論じにくいということも、十年以上たってやっと自覚できたことである。

この物的環境、人的環境の整備がすすむにつれて、子どもをみる眼は少しずつではあるが確かなものへと育っていった。さまざまな問題行動も臨床的に意味があり、子どもの発達過程の中で位置づけられるものであるということも、はっきりと理解できた。また障害児の対人関係の発達と認知的な発達とが本来的に別々なものではなく、統一的に理解していくべき重要な視点であることもわかった。

ここにきて臨床家になりたての頃、最も大切にしたいと願っていた『自我を育てていく』という意味が、臨床実践のなかで、ようやくはっきりしてきた。すなわち、物的環境も人的環境も整備しつつ、トータルな発達的視点を構築することによってはじめて、障害児の自我発達を考えることが可能になったのである。初志のおもいが貫徹できたよろこびは、実に淑徳で十六年の臨床が経過した後だった。

（淑徳大学助教授）

社会福祉施設の経営に関わってから行政の人たちと接触する機会をたくさん持った訳であるが、この三十年間で行政の人たちの考え方もかなり変わってきたようである。民間社会福祉に関わる行政の態度は、基本的には理解し援助してくれているように思えるのであるが、時折背筋がぞくぞくしてくるような冷たい悪意に満ちた態度に出会う事がある。要するにおかみの金で成り立っている仕事にも関わらずそれを私服を肥やしているに違いないと言う猜疑心で見ている目を感じることがあるのである。行政からみると、施設長を始めとして職員のすべてが措置費という財源によって生計を営んでいるのであるから、自己経営努力をすべきである民間などと言えないのと言うのである。理事長が施設長を兼ねている小規模法人などは、特に風当たりが強いと言われている。では、なぜそのような猜疑心を持ちながらも民間社会福祉法人を野放しにしておくのであろうか。

これを真剣に考えてくれる行政や学界の人たちが案外少ないのには驚かされるのである。日本の特徴とも言うべき公費によって成り立っている民間社会福祉事業の特質をどのように考えているのかを明らかにして行かない限り民間社会福祉事業を経営する人に明るい気持ちがみられないとも思うのであるがどうであろうか。たしかにかつては、社会福祉事業のなんたるかを心得ずにこそこそしているような印象を与えたり、希ではあるがけしからぬ私服を肥やす（肥やすほどのものがあるわけではないと思うのだが）ような不祥事もあったようである。ところでこのような行政の猜疑心が専ら監査に現れてきて細かい基準はずれについて行政がめくじらをたてるような傾向が助長されてきてしまったのが大問題なのである。

かつて以下のような事実があったことを重要視したい。

措置費制度の開始時において、占領軍の指導があったという憲法第八十九条により国費を持って民間社会事業の助成が禁じられていたにも関わらず、この事業を行う民間施設を社会福祉法人という公的性格の運営体にして、これを国の監督下におくから公費を導入できるといういわゆる「逆理論構成」で措置費制度を作ったという行政の決断があったのである。ここに民間社会福祉事業に関わる日本政府の姿勢が示されたといってよい。言うまでもなく措置費は、児童福祉法及び精神薄弱者福祉法に基づき、措置主体が要保護児童等を児童福祉施設等に入所等の行政処分を行った場合の、措置に要する費用である。ただこの措置費は、施設側にとっては、別に国が定めた最低施設基準を維持する施設の運用費なのである。したがって民間社会福祉事業の経営は、国からの措置費に全面的に依存せざるを得ない構図となり今日に至ったのである。

そしてこの時から日本の民間社会事業は公的な社会福祉制度に組み込まれたと考えなければならないのである。つまりここに国の民間社会事業に対する信頼関係の出発点が作られた事になるのである。つまり国が、国の責任で行うべき社会福祉施設を直営の公立施設と民間委託とに分けて行う事にしたのである。さて民間に対する事業委託と直営の施設経営とをその後の五十年の歳月の経過の中で比較した場合どのように考えたら良いものであろうか。つまりおおかたの意見は、これからは更なる「民活」しかないというのである。

今日の社会福祉情勢は、大きく変わっていると考えられている。特に従来の貨幣的の救貧的な福祉観から、非貨幣的な文化的福祉観へと転換している状況において、これからの民主社会の成熟にかかわる多様な福祉需要への対応へ公権力をどのように使用していくかが政策課題として提示されなければならない。従来のような監査姿勢では、この時代要請に乗り切れないと思うのである。民間施設も、従来のような表面的な形態重視の監査対応姿勢では、社会福祉への自主的な先駆性や開拓性を示す事が出来ないのではなかろうか。おそらくこれから社会福祉法人の自主財源の調達や新しい委託事業への対応が求められてくると思う。このような情勢に対応すべく全社会福祉法人は職員を教育して、福祉への対応の幅を積極的に進めていく事が望まれているのである。

施設経営の創造性　（その十八）

石井哲夫

私たちのしごと

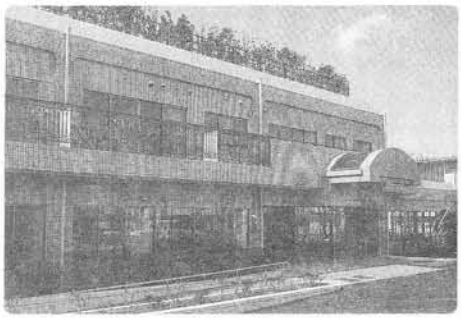
須藤福祉センター各事業所からの報告

赤塚福祉園の開園

高嶺　茂

赤塚福祉園は、嬉泉が板橋区から管理・運営を委託された事業で、同様の施設として、高島平五丁目福祉園（平成三年開園）に次ぐ二番目の施設です。去る、三月二九日、東京都障害福祉課課長・板橋区長・区議会議長・町内会長・地域の方々・保護者等多数のご来賓の出席を戴き、賑々しくも厳粛な雰囲気の中で開園式が行なわれました。

福祉園には以下の様な施設があります。①程度の重い心身障害者に対して、その心身の発達を促進し、社会生活能力を開発する為に必要な指導を行う『心身障害者生活実習所』（定員四〇名）、②精神薄弱者で雇用されることが困難な人を通所させ、必要な訓練・指導を行い、且つ、職業を与えて自活できる人には自活への援助を行い、自活の困難な人には福祉的就労（＝作業）の場を確保し、一人の人としての豊かな暮らしが実現できるように援助する『精神薄弱者授産施設』（定員一〇名）、③就労又は授産施設等に通所している精神薄弱者に対し、生活の場を提供し、地域社会での自立生活を援助するとともに、在宅の心身障害者を緊急時に於いて、一時的に保護し介護する『生活ホーム』（定員六名緊急保護二名）等の施設です。尚、緊急一時保護は、今年の六月から始まります。



福祉園外観

さて、動き出した福祉園での生活を紹介すると、「生活実習所」では、利用者は昨年まで五丁目福祉園で継続的援助が行なわれた人たちで、新しくスタートした生活も比較的容易に移行することができ、三つのグループでは個々に、食事・排泄・歩行等の日常動作の介助はもとより、人間関係の拡大と向上、自発的活動の強化を図る為の個別的関わり、個々の特性・能力に適した作業や創作活動、ＡＢＣ体操を取り入れた活動等を進め、園での生活リズム作り、健康の増進、日常生活の自立、能力開発等を目標に行なわれ、「授産施設」に於いては、現在施設内清掃、給食配膳の手伝い等の仕事を〝生活改善課題〟として位置づけて、作業を行なったり、陶芸・機織り等の場面を通して、作業意欲の動機づけを図る等の活動を行なっています。また、「生活ホーム」では、区内の福祉作業所や一般企業等に働きながら、世話人の手助けを受けて生活面や金銭面での自活を目指し、現在、食事の準備、掃除、花の水やり等の様々な担当を決めて、楽しい生活をしています。

最後に、園長以下新しく加わった職員が一致団結し、赤塚福祉園をご家庭や地域の方々に開かれた園として、行政からの信頼に応えられるように、活動していきたいと願っています。

（赤塚福祉園指導主任）

式　典

皆々様に支えられて

● 感謝のご芳名

（ご寄付をいただいた方）

平成四年度（平成四年四月より平成五年三月）世田谷区及び袖ケ浦の本部、事業所に金品のご寄付をいただいた方々のご芳名を掲載させていただきました。衷心より感謝申し上げる次第です。なお、年二回のバザー開催に際しては、多大の方々のご協力をいただいておりますが、紙面の都合上掲載はできませんでした。どうかご了承下さい。（順不同）

宮内章様、木戸チナ様、中西健一様、吉賀敏郎様、岡庭博様、福原真智子様、瑞穂工業技術研究所様、武井工務店様、秋山家御交誼の皆様、村田堅一様、ひかりの学園共済会様、二木俊彦様、竹内靖夫様、黒林正様、日本ニュクリア・フュエル様、秋山信靖様、村岡精一様、原京子様、吉田瀧太郎様、吉田きく様、鈴木豊子様、伊藤温様、吉原勝彦様、片桐一平様、山岸敏男様、東洋英和女学園短期大学宗教部様、日本女子体育短期大学保育科一同様、千歳丘教会様、端数倶楽部様、富士ゼロックス株式会社様、内藤喜久子様、持田真二郎様、市川すみ様、高田昇一様、時永康男様、水島恭子様、田村匡様、ひかりのガレージセール代表工藤鎮子様、斉藤穂様、嬉泉後援会様、出口晴三様、武藤昭子様、ムトウコーポ様、フロプシーファミリー様、日立親切会様、世田谷区様。

☆袖ケ浦地域協力者

昨年度の袖ケ浦地域でのボランティアの方々、利用者の雇用や実習を受け入れて下さった事業所、また、日常的に「のびろパン」等の販売に協力して下さっている方々、養鶏・牧場作業に無償で野菜や貝殻等を提供下さる方々、毎日の買物指導や週末帰宅の際にご協力下さっている方々あるいは地域での各種のイベントにお誘いくださったり、その他様々にご協力をいただいた方々のご芳名です。（順不同）

㈱富士住建様、スーパーしんめい様、ビジネス旅館長浦様、特老袖ケ浦菜の花苑様、春日裕様、手作りケーキの店ポニー様、古川皮膚科医院様、東京電力労組青年部様、河村義昭様、袖ケ浦市社会福祉協議会様、ＪＡ長浦支店様、同根形支店様、特老サニーヒル様、シマムラ文具店様、主婦の店さつき台店様、黒木照子様、新谷多恵子様、加藤義明様、池田久司様、比和野京子様、井村ますみ様、明峯和子様、提橋元子様、ブックセンターフォトイマゼキ渡辺様・山本様、いその文具店様（店頭の八百屋のおじさん）、シバサキ建設様、野里公文塾土屋様、福土台保育所様、根形保育所様、久保田保育所様、袖ケ浦市財政課様、同健康管理課様、同生活環境課様、同保健センター様、同広報課様、千葉興業銀行袖ケ浦支店様、三育フーヅ様、斉藤とも子様、三浦トヨ子様、松崎きみ子様、とんかつ不二亭様、東京ガス木更津営業所様、袖ケ浦市民会館様、根形公民館様、平川行政センター様、平岡公民館様、長浦公民館様、袖ケ浦郷土博物館様、長浦駅様、袖ケ浦市消防本部様、鍋島金物店様、村山ダクト製作所様、袖ケ浦ロータリークラブ様、平岡公民館図書室白鳥様、秋元カク様、富士食堂様、ミニストップ長浦店様、花川金物店様、保坂石油様、県立袖ケ浦高校様、松本一男様、渡辺義一様、黒川孝男様、仲田由夫様、平野米穀店様、カネサカ水産様、大橋屋豆腐店様、昭和中学校様、袖ケ浦ボランティアセンター様、ダスキン袖ケ浦店様、神崎製紙様、日本道路公団習志野パーキングの皆様、セブンイレブン袖ケ浦店様、袖ケ浦駅キオスク様、遠藤隆吉様、君津袖ケ浦高校生ボランティアの皆様。

袖ケ浦の就労事業所（その一）

現在、袖ケ浦ひかりの学園の利用者とグループホームの住人が、四ヵ所の事業所へ一〇名前後パートタイム就労しています。ここでは日々のご協力に感謝の気持ちを込めてそれらの事業所のご紹介をさせていただきます。これまで約六年間袖ケ浦ひかりの学園において、利用者の社会参加と地域との交流を担当し、直接にそれらを開

拓し関わってきた者として執筆させてもらいます。

ありていに言って、学園の立地条件は社会参加を進めるのには最悪です。学園は町から遠くはなれた丘陵地帯にあり、町は人口が少なく、開発された新興の住宅団地と昔ながらの田園地帯、その一方で海岸地域は広大に埋め立てられ大企業のコンビナートが連なっています。何しろ車を使わざるを得ませんので、まず始めたのが焼芋とパンの出前巡回販売でした。人が集まるのはスーパーか銀行と駅そして市役所。そこで店頭販売の形を作りました。そして販売から育ってきた人を主体に職場実習を進めることになりました。

職場開拓で私たちの求めることは、第一に「好意的な理解者」を得ることです。作業能力がある一定水準に達したからと言って、やみくもに能力を生かせる事業所を探せば事足りるとは考えません。立地条件が悪い上に理想も高いので、なかなか受け入れ事業所は見つかりません。それでも時間をかけ、あらゆるつてをたどり地道に動いていると何とか巡り会って来るものです。

すでにご本人達が「ひかりのタイムス」でたびたび紹介しているのが、「富士住建」「スーパーしんめい」と「旅館長浦」です。今回は紙数の関係で「しんめい」を紹介させていただきます。ここはパンの店頭販売をさせてもらって、社長に率直に相談をかけました。念頭にあったのはひかりのタイムスの山岸君。「こういう人がいるんだけど店で働かせてくれないか。」社長は即答「いいですよ。」こちらは拍子抜けというか驚きました。何しろお互い初対面で本人とも逢わずに即ＯＫですから。社長曰く「うちはあらゆることをオープンにやっている。従業員だって皆仲間同士と思って力を合わせてやっている。先生、自閉症とか言っても同じ人間なんだからやる気さえあればお互い工夫していけば何とかなるんじゃないですか」というわけです。この言葉、「自閉の人の難しさを知らない」とこちらが思ってしまわず、まずは言葉どうりに受け止めることにしました。何よりも社長の人柄に直感的に好意が持てたのです。在原さんです。この時から自閉の人の特徴を従業員の人に分かってもらう私の仕事が始まりました。

一方、山岸君の方はこの話を持ちかけたところ断わられてしまいました。大ショックでした。断わられることは不覚にもあまり想定していなかったのです。しかしながら「選択的作業指導」を理念とし、本人の自発性や意欲を最優先に尊重していますので、職業選択の自由ももちろん保障しなければなりません。何回か話しあっても山岸君の考えは変りませんでした。そこで考えに考えた末、「社会には出たくない」とかねて言っていた市川君に持ちかけました。案の定かなり抵抗を受けました。作業能力は高いのですが独特の対人恐怖のこだわりが強いのです。しかし、お金がもらえること、倉庫の仕事だけにして人には逢わないようにする、という条件で折り合いがつきました。

直接市川君を世話してくれるのは、今の店長、社長の息子さんです。若い方ですが相当の働き者で、朝行っても夜に行っても仕事をしています。お店のあらゆる仕事をこなしています。この方を見ていると福祉の現場はきついなどといえません。店員の出入りも多いようですが、拝見していると「ちょっとあやしいな」と見える若者を何人も引き受けて時間をかけて一人前にして行ってます。「人それぞれにいろんな事情がありましてね。でもなぜか私はああ言う半端な連中と気が合うみたいです。市川君にもいろいろ妙な癖やこだわりがあるけど、こういう人はあせらずに長い時間をかけてゆっくり育てて行きましょうよ、先生。なんとかなっていきますよ。」と言ってくれるのです。有難いことですし、逆にこちらが教わります。昨年二年目に入り仕事ぶりを評価してくれて時給をアップしてくれました。そして彼の人へのこだわりも随分と和らいで来ています。

（袖ヶ浦のびろ学園　友田　篤）

嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉
鯉のぼり会

子どもの生活研究所では四月二三日「鯉のぼり会」を催しました。

前日は強い雨、当日もすっきりしない空模様。それが会が始まると同時に太陽が顔を出してくれました。

今年の石井所長のお話は、鯉のぼりの由来について。とても分かりやすく話され、小さい組の子どももうなずきながら聞いてます。大きい組の子どもに至っては、質問や感嘆の声が途切れませんでした。

さて、お待ちかねの鯉上げです。みんながみんな綱を曳きたくてウズウズしています。そこで、組ごとに曳くことになり、大きな鯉たちは上がったり下がったり。その度毎に拍手と大きな歓声が庭に響きわたりました。しかし「泳がないねぇ」とつぶやく声。と、その時一陣の風が吹き、鯉たちは一瞬ふわっと舞い上がったのです。駆け寄って触ろうと跳ねる男の子たち、「キャー」と喜ぶ女の子たち。ひたすら柏餅をほおばるぞう組さんたち。とてもドラマチックな会でした。（水下明美）

めばえ卒園式について

めばえ学園の卒園式では、卒園証書の代わりに職員手作りのアルバムを贈呈します。ページを開くと、お気に入りのキャラクターやマーク、電車や食べ物など、そのお子さんが大好きな物の絵と共に、思い出の写真や職員からのメッセージが所狭しとならんでいます。毎年「今年はあまり凝り過ぎないようにしよう」と思うものの、一旦作成に取り掛かると、つい「これも載せたい」「あれも描こう」と、いつの間にか盛り沢山になってしまいます。表紙の題字は、石井所長に書いていただいています。今年は『明るむ（あかるむ）』になりました。

そのアルバムの授与も無事済んで、式も終りに近付いたころ、あるお母さんが「自分はここで、この子の愛し方を教わった」という内容の挨拶をされました。それを聞いて、この一年間を振り返り、来年も気持ちを引き締めて、自分にできる限りのことをしていこうと、勇気づけられた思いがしました。（柏木理江）

〈袖ヶ浦〉
画家竹田鎮三郎夫妻の来園

四月二一～二二日、メキシコ在住の画家竹田ご夫妻が袖ヶ浦に来園しました。竹田先生は、メキシコ在住三〇年余りに及び、オアハカという純血のインディオが多く暮らす町で、インディオと共に長い間生活しながら芸術活動を続けてこられ、メキシコ政府をはじめ数多くの賞を受け、芸術大学では、学生の指導も長年されています。

そもそもは、石井所長が以前から、竹田先生の絵に魅かれるものがあり注目していたところ、六年前、国際協力事業団（ＪＩＣＡ）よりメキシコの自閉症治療教育の指導のために派遣された折りに親しく交際が始まったのです。そして本年三月には、日本社会事業大学より再びメキシコに派遣され、オアハカの竹田先生のご自宅を訪問し歓待を受け意気投合しました。

今回の来園の主たる目的は、学園に壁画を描いてくださることとモニュメントを制作くださること、さらに今後展開するのは、袖ヶ浦ひかりの学園の利用者の飯田真奈子さんの父上が先般亡くなられ、遺言で長浦駅前の土地建物を学園に寄贈くださり、そこを学園の文化とメキシコの文化を融和させて地域へと発信し、地域交流と利用

者の社会参加の拠点とする「文化交流の家」構想にもご協力いただけることになり、それらの下見に来られたわけです。

先生ご夫妻は、秋には再び大学のお弟子さん達を連れて来日し、制作に取り掛かることになりました。今から心踊る思いでおります。

（友田　篤）

山口荒野君からの贈物

ほぼ一〇年、私たちと暮しを共にした山口荒野君が、袖ヶ浦のびろ学園を退園して市原の「ふる里学舎」へ入園しました。先日ご両親が来訪、思いがけずにレーザーカラオケをご寄贈くださいました。

荒野君は小さいときからいろんなマークが大好きで、最近は「TOILET」や「浴室」マークに凝っていて、お家から持参してはあちこちと貼っていました。「アップリケ」もなかなかの腕でした。それに音楽が大好きで、演歌から童謡、結婚行進曲まで、歌ったり演奏してくれたりしたものです。「音」といえば、よく職員の目を逃れて「非常ベル」を鳴らしてしまい、全館放送で「ただ今の非常ベルは山口君のいたずらです」と言われたのもちょっぴり苦い思い出です。

そんな歌好きで明るい荒野君から贈られた立派なカラオケセットは、今後、袖ヶ浦のびろ学園で大切に有意義に使わせていただきたいと思っています。

（板垣里美）

〈高島平・赤塚〉

ダンスセラピー

赤塚福祉園では、ソーシャルワーカーの町田章一先生によるダンスセラピーが、赤塚、高島平五丁目両福祉園の職員や、利用者を対象として、毎週一回行われています。柔軟体操から始まり、ペンギン歩き、向かい合ったらア～～ア～～ア～～という挨拶らしい変わった動きで全身の力を抜いて弛緩の状態を経験してみたり、一対一やグループでの模倣運動、自分のイメージで踊り続ける創作の世界に浸ってみたりと、様々な動きの中でお互いのハートを通わせていきます。町田先生の男性とは思えないほどのしなやかな動きには常に目を奪われていますが、ときには、ランバダがホール中に鳴り響き、全員狂ったように踊り出します。ダンスセラピーに、皆さんも気軽に参加して、疲れた肉体を十分に労ってあげましょう。

（白石雅一）

高島平のひなまつり

『部屋の中央には机が並べられ、机の上には花器が置かれている。花器の横には桃の花を中心に花が用意される。普段は主役となる雛人形は、部屋の隅に飾られ、あまり注目を浴びることはない。女性の利用者が次々に呼ばれ、男性利用者と職員の見守る中、和服を纏った女性職員に援助されながら、緊張した面持ちで生け花に取り組んで行く。流れているのは聞き慣れた「ひな祭り」の歌ではなく、静かな琴の音で、一般的なひな祭りとも、日頃の指導の騒がしい雰囲気とも明らかに異質な空気がそこにはあった。皆が生け花を終え、雛人形の回りに飾った後で、今度は女性職員による舞いが披露される。急ごしらえではあるが、日本舞踊の基本を取り入れ、女性の立ち居振る舞いの美しさを表現したのである。』

「女性としての優しさや奥ゆかしさを感じてほしい」。それがひな祭りに込めた私たちの願いでした。日頃の利用者の暮らしぶりを見ていると、「恥じらい」といったものが少し欠けているように感じられます。身なりばかりでなく、心の優美さ、淑やかさを、生け花や舞いの中から感じ取ってほしいと考えたのです。

（北川　裕）

ひかりのタイムス

独立第19号

ひかりのタイムズは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドヴァイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

のびろ販売担当　根岸香先生インタビュー

（根岸先生は、平成四年度ののびろ販売の担当で、のびろ販売をよく知ってるのでインタビューしました。）

インタビュアー
袖ヶ浦ひかりの学園利用者
山岸　裕

山岸「何時から、何時までやっていますか。」

根岸「午後三時から六時まで、実働三時間」

山岸「どんな商品を売ってるんですか。」

根岸「火曜日と木曜日が、野菜、水曜日と金曜日がパン」

山岸「野菜は、どういうのを売ってるの？」

根岸「のびろで取れる無農薬野菜が主体」

山岸「どこで売っていますか。」

根岸「野菜の時は、袖ヶ浦市役所ロビー、パンの時はスーパーしんめい」（地元のスーパーマーケットです。）

山岸「お客さんの反応は。」

根岸「市役所の人は利用者によく話しかけてくれる。しんめいのお客さんは、話しかける人もいれば、ただ通りすがりで見る人もいる。

無添加のパン・ひかりの卵は、評判がよく売れる。美味しいという反応あり手応えがある。野菜は、固定客がついてから、よく売れるようになった。」

山岸「メンバーは。」

根岸「浅野君、山口君、穐山君、安斎君、平岡君、斎藤君の六名。

のびろの利用者が、毎日日変わりで参加してやっていた。

ひかりのからは、斎藤君がレギュラーで毎日やっていた。」

（昨年度の販売メンバーです。）

山岸「利用者の総括は？」

根岸「のびろの利用者はかなり意欲的だった。斎藤君は会計をやるようになってから意欲的で上手になった。」

山岸「のびろ販売の総括は？」

根岸「二年間通じて利用者の人と外に出て大変だったけれど、楽しかった。

中で見せない表情がある時、こちらとしては、やりがいがあった。例えば、お客さんとお話しして笑ったりするとか、ニコニコして返事をしたり、学園で、怒ったりする利用者でも、販売だと我慢していた。」

（根岸　香）

〈編集後記〉

いつも編集して思うのは一方通行で、読者とのコミニュケーションがありません。

読者が投稿をして感想をひかりのタイムズまで出してください。お願いします。

今回は、若い女性指導員が作業担当者なのでインタビューをしました。感じた事は、中間管理職のひとは、自分が何をこの場で、言いたいのかがハッキリしている。

若い女性職員はマニュアルとして仕事している感じがする。こちらがつきつめたコメントを求めると、返答に窮してしまう。それぞれの立場でコメントも、異なる。微妙にニュアンスも違うと言う事を今回新たに発見した。（山岸）